

# 同窓会会報

高知県立大学看護学部

第10号

平成27年3月20日発行

〒781-8515 高知市池2751-1



県民大学として  
二期目の学長にご就任された  
南 裕子学長



南 裕子 学長

梶原和歌 同窓会長

永国寺キャンパス 学長室にて

高知県立女子大学から、公立大学法人 高知県立大学となり、はや四年が経ちました。本法人の初代理事長兼学長として、大学運営、高知県の高等教育行政、看護界、さらには国外において幅広いご活躍をされ、常に先を見通しながらリーダーシップを発揮してこられた南 裕子先生が、平成27年4月から、一法人二大学となり、さらなる発展を続ける高知県立大学の二期目の学長として、ご就任されることになりました。

本会報では、ご多用の中、南先生に貴重な時間をさいいただき、梶原和歌同窓会長が、これからの大学運営や構想、および看護学部同窓生に向けての期待することについて、お話しいただきました。



主な内容

- ①南学長と梶原同窓会会長対談
- ②看護学研究科のさらなる発展に向けて
- ③全国各地で活躍する専門看護師(CNS)
- ④ようこそ先輩！
- ⑤カナダで活躍するファミリー・ナース・プラクティショナー
- ⑥DNGL1期生Global Leaderを目指して
- ⑦温故知新 その6
- ⑧同窓会役員として
- ⑨夏銀河～学生ボランティア活動支援



# 南学長♥梶原同窓会長 対談

— 県民大学としてのさらなる発展に向けて —

**梶原会長:** 理事長兼任で2大学をまとめられ、今期、2期目の県立大学の学長に就任されました南 裕子先生に、これから県立大学をどういうふうにつなげていかれるのか、今後の構想や大学全体、そして看護学部について夢を語っていただければと思います。

## ◆ 県民大学としての大学の新たなスタート



**南学長:** 4年前に法人化した、男女共学になったこの大学に理事長の学長として就任しました。法人化することというのがどういうことなのか、法人化をみんなが心一つにして大学の発展に尽くせるだろうかという不安もありました。

県立大学だった所から、自分たちの自立した法人化の下の大学として共学の新しい大学になっていくことについて、みんながどう思っているかということもはっきり分からないままに就任したという状況でした。しかし、案ずるよりも産むが易しというのが本当で、産むところまでが大変だったけれども、産んだ以上は育てていかないといけないという気概をみんな持ってらっしゃったので、全ての大学の教職員が一丸となって法人化後、新たな社会の要請に応えられる大学として動いてきたというふうに思います。

私が県民の主立った方にご挨拶をさせていただく時に、「この大学はどのように見えていますか」「どんな大学だと思いますか」というのをお聞きしたんですね。

その時に何人かの方がおっしゃったのは、「高知女子大学というのはいいい人材を輩出している。特に看護学部は、長い間看護界を引っ張っていき、県内もそうだし県外も国内外に亘ってやっていける人材を輩出しているということはよく分かっているし、他の学部も人を育てていくということに関しては頑張っている大学だというのは分かるけれど、あとは何も分からない。非常に垣根の高い大学だと思います。誰がそこに居て、どんな仕事をしていて、どんなことの研究をしているか。または、何を大事に思っているかというようなことが分からない」ということを、率直におっしゃっていただきました。

それは、否定的な意味ではなくて、本当に分からないんですということで、これは県民に見える大学にしていけないといけないなって。それも一つの使命だなというふうに思ったので、早速に「県民大学」という標榜をして、そして地域と共に育てていく大学、新たな言い方で「県民大学」がスタートしました。

## ◆ 県民大学の見える化を実現した学生たち・・・「立志社中」に立ち上げ

**南学長:** 「県民大学」として地域で貢献しているのをどうやって地域の方が理解できていこうかということ考えた時に、一番活発なのが学生だったんです。この学生の素晴らしい活動を県民に分かるように、学内としても位置付ける仕組みを作りたいと思って、立志社中というプロジェクトが始まりました。板垣退助の立志と亀山社中を取って「立志社中」という名前を付けました。

学生たちが主体的に動いていく活動に対して、必ず顧問を教職員がなり会計処理できっちり大学がつながってできるようにするという、責任を持ってプロジェクトを動かしていくという経験をするのを提案してもらいました。市民も入れた審査会を開いて、学外の方々も大変注目してくださって、特に地域の方が喜んでくださって、だんだんと見える状況が出てきました。



## ◆ 地域のニーズにこたえる大学としての役割

**南学長:** 地域の課題がどんなものがある、大学は何ができる

だろうかということについては、大学の地域課題研究部会から県下の団体に調査票を出しました。どんな課題があり、どんなことを大学と提携していきたいかということ調査すると、非常に回答率も高く多くの人に関心を持ってくださったということが分かったのです。そこで分かったのは、実際に大学と提携しているのは、4分の1にすぎないということでした。大学と連携してやっていきたいかという、81パーセントの団体が、大学と連携していきたいという回答が出てきて、地域には大学と連携したいという期待があることがわかりました。

地域が出てきたニーズに対して、大学側が対応していけるシーズはどのようなかということで全学的な教員の調査をかけて、シーズとニーズのマッチングということができているかどうかをやってみました。教職員らしい非常に画期的な報告書が出たんですね。それで教職員も、地域の人たちは自分たちとつながることを期待してくれているのだなと思いました。



### ◆ 求められる大学としての役割

**南学長:** 社会の動きが激しい中で、今大学は変わることが期待されています。地域と共に一緒になって頑張っていけないといけない。  
その中の一つが域学共生で、地域と大学が共に生きるという産官学連携の一連なんです。特に地域との連携ということを重んじた動きで、COCという、Center of Community Projectと文科省が呼んでいるものなんです。県民大学だから、全学的に地域に入っていくことをしようと。学生が必ず1回生の時に一度地域に出て行って、地域の課題をじかに、地域の人から教えていただいたり、自分たちも発見したりする。学部横断型で地域の課題に取り組んでいくというようなことを、域学共生のプログラムを必修科目で置き始めたんです。  
地域とは何なのかということの学習も座学でするし、それで実習に2回出ていくというのを全学的にやるという提案をしました。

### ◆ 看護学部の代々続く地域とのつながり

**南学長:** 地域とつながるというのはどういうことかという、公開講座をしたり、自分たちが持っている知識を一般の人に使っていただくということが中心で、看護学部が主になりながらやってきました。  
一つに土佐市との連携というのがあります。そこでは、研究と一緒にあって、研究で地域の課題を掘り起こして、それから行政で制度を変えていくという仕組みなんです。画期的な研究(の成果?)は子どもの成人病、生活習慣病の兆候の発見だったんです。土佐市と一緒にやってやったので、土佐市は、これはゆゆしきことだと。それで、小学5年生と中学2年生に生活習慣病健診を義務化したんですね。発表会をして、土佐市の人も来てくれて、うちでもぜひこれをやりたいけれども、何とかしてくれないだろうかというようなご意見も頂いたりして、見える化ですよ。

### ◆ 看護学部の学生たちの発揮するパワー

**南学長:** 看護学部も2つ大きなプロジェクトがあります。1つは「イケあい」という防災ボランティア活動です。その経験を基にして学生は岩手県立大学とつながって、岩手県立大学が全国の学生のボランティア活動をコーディネートしてくれるというプロジェクトを立ち上げたんです。それに毎年行って今、同窓会からも応援していただいたりしているんです。  
学生が学んだのは、もちろん被災のひどさと住民被災地の人々の苦悩と、頑張りですが、同時に、「高知は南海トラフが予測されている。だから自分たちの失敗した経験、良かった経験を基にして、高知にそれを生かしてほしい」というメッセージを学生が重く受け止めて、未災地ツアーというのを計画したんです。  
高知も、津波に備えて地域が頑張っている、それを全国の学生に見てもらおうと。未災地ツアーというのは、未災地なんていう未来の災害とか、まだ災害が来ていない所とかというような発想は、本当に驚いたんです。  
そういうのは、公立大学学長会でも発表したりしてくれて、学長会の中でもうちの学生は元気があると言ってきて、すごく面白かったです。そのような学生たちの動きがあって、それを全学的にやっていきたいという土壤があるんですね。

**南学長:** 地域の課題を、地域の住民の感じている課題から事柄に入っていくという視点は、今までの看護の実習とはかなり違うだろうと思います。

患者さんから見た時に、この病院の構造やシステムや看護師さんはどう見えるのかというのは、じゃあ、どう改善しないといけないかという経験をしていく、今までの従来の看護実習とは違うので、看護の先生のマインドをすごく変えてもらいたい、私は思っているんです。

もう一つは健援隊といって、これは第一期生で入ってきた男子学生の人たちが中心になって、よさこい踊りや体育のいろいろなイベントで脱水症予防のための運動をやるボランティア活動です。

「健援隊」、今、すごい人気なんです。地方の中山間のイベントなんかには呼ばれて行って、そこではAEDの講習、デモンストレーションもやるんだけど、パフォーマンスがすごく。人に知的に訴えるだけじゃなくて心に訴えていって、みんながうわってなって。男子学生が入るということは、こういうことなんだって思いました。



◆ 先輩方が築いてくださった歴史を礎に  
全国を牽引する高知県立大学看護学部としての誇り

大学の教員にとっては研究推進していくのに重要なんですけど、看護学部が率先して応募もするし、伝統的に、お互いの研究計画を見合うという文化ができています。多くの研究者は自分の研究計画に自信もないし、人に見られるなんてすごく嫌なのに、看護学部はしっかりと見合っているし、いい研究計画が出されるので、採択率は全国でトップになるんです。これは、国公私立併せて。看護学部だけで、62%の採択。全国平均、20何%ですよ。あれだけ実践で社会貢献もし、公開講座もやり、いろいろ努力もし、実習だけでも大変で教育も大変なのに、研究もしっかりした研究ができる集団。

看護学部はよく全国に先がけた学部だけでなく、引っ張っていくリーダー格の老舗で、初めは知人ぞ知る大学とかつて言っていたんだけど、今やもう、本当に注目されて、本当にこの大学の中で看護学部は重要だなと思います。看護学研究科も、高度専門看護師から始まった臨床看護師、臨床のリーダーたちのための大学院で、本当にすごい学部になって。誇らしい学部だっているふうになっています。

**南学長:**看護学部では、本当に優れた教員がそろっているんですよ。例えば指標で言えば、科研費というのが

**梶原会長:**直接地域の生活をしている人たちと結びついて、生活者を大事にし、地域の課題を掘り起こしていくということとつながっている。学長が来てくださったからここまで県立大学が、たった4年でね、本当に地域に見える大学に変わっていています。

◆ 高知の自然、暖かさの実感

**南学長:**高知に帰って来てまず思ったのは、光が明るいということ。

県庁おもてなし課のほうに出てくる中国の言葉で、観光とは光を、その国の光を見ることって、本当にそうだなんて。光っていうものとか、野菜とか食べ物のおいしさ。それからスーパーマーケットに行っても、電車に乗っても、いろんな所で、本当に普通の生活の場が人が優しいっていうのは、高知の人の明るさと前向きさというのがあって、本当に人は自然の中で、人の中で生かされているんだっていうのが、個人的に経験していく。高知に帰ってきて良かったと思うことですね。



◆ 財産としての同窓会  
同級生とのつながり



11回生の集い(永国寺キャンパスの正面玄関にて)

**南学長:**今の自分の財産だと思っているのは、同窓会なんです。私の個人的に11回生は22人で、今は18人の住所も全部かかっていて、連絡が取れる。この間、卒業して50年たったんで高知で同窓会って、ここでみんな話し合ったりしたんですけど、12人来れたんですよ。現役のフルタイムで働いている人が私を入れて3人。同窓会を毎年、ずっとやっていたんですよ。3年ぐらい前までは。

卒業直後からノートを送り始めていて、みんな、それに書いています。人数分、18人分を作って、みんなそれを持っていて、すごい財産です。

60年。毎年、毎年どういうふうになっていくかというのが、お互いに分かります。みんな、一人一人のドラマが50年続いて、それをお互いが感じ合っていくっていうのはいいですね。途中でいろいろあったとしても、本当にいい仲間にも恵まれた。そこがこの学部を出た良さだだと思います。

山崎美恵子先生(5回生)からもらっている宿題があって、「定年退職を迎えた卒業生たちは、大学のために何かしたいのよ。それで、できることがあったらしたいの」っておっしゃってくださっていて、そういうのはありますよね。看護学部は看護学部で同窓会と一緒につくってくださったらいいなって思います。先輩や後輩たちが持っている力って、すごいですからね。

**梶原会長:**看護の概念って、人間、環境、看護、そういったものを統合して発揮できる看護者がやれることって、まだまだやれる人って多いと思うから。直接社会にもやっていることを報告して、同窓会としても積み上げたいですね。

◆ これからの看護学部の発展へ  
期待を寄せて

**南学長:**松本女里先生(8回生)が聖路加国際大学に行かれて、東北にも入られている。

あんな仕掛けを、NPOとかケアセンターとかを、私はつくりたいと思っています。

今度、寄付講座を県からもらうことになって、寄付講座で中山間の訪問看護を強化していくという取り組みを行っていきます。医療と介護の統合的推進のあの法律の改正の意味を、看護界がもっと積極的に使ったらいいなって思いますね。高知の寄付講座は一つのモデルになるでしょうけれど。

看護学部卒業の、卒業生たちのやってこられた道筋一つ一つがモデルで、大学として、大学の看護学部は何をしていけるか、いろんなことができたらいいなって思います。

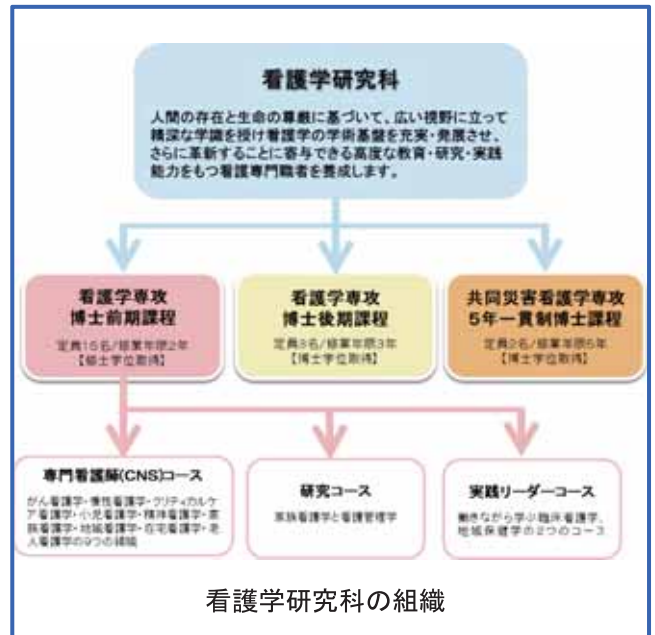


# 看護学研究科のさらなる発展に向けて

平成26年4月1日、看護学研究科は新たな一歩を踏み出しました。高知女子大学時代からの念願でした「看護学」の博士課程(前期・後期課程)の開設が、同窓生の皆様と大学の諸皆様方のご支援のもと実現しました。看護学専攻の博士前期課程、博士後期課程、そして、新たな挑戦として、共同災害看護学専攻の5年一貫制博士課程を開設し、飛躍しつつあります。

博士前期課程では、臨床、行政、教育現場で活躍できる高度な職業人の育成と実践的な研究を行うことのできる研究者・教育者の育成、博士後期課程では、看護学の深奥を探究する研究・教育者の育成に力を入れていきます。さらに、国公立の5大学が共同で教育する博士課程では、国内外で活躍する「災害看護グローバルリーダーの養成」を行っていきます。留学生も迎え、国際的な環境のなかで災害看護学が大学院生等の力によって構築されていくことを希求しています。

現状をふまえつつ10年後を視野に入れ、夢と希望をもって入学した大学院生とともに創発・発展していく看護学研究科でありたいと思います。



## ■ 博士前期課程の講義風景

9領域の専門看護師コースをもつ、全国的にも有数な大学院です。院生は、講義や実習を通じて同級生や専門職の方々と討議することで視野を広げています。研究コースの拡充、働きながら学ぶコースの充実もはかり、教育の質保証に努めています。3つのコースの院生は共通科目の講義を通して交流し、学びを深めています。



## ■ 大学院修了生の交流会

大学院生は、在学中はもちろん、修了後も看護学の発展・深化に寄与する高度な教育・研究・実践者としての能力を高めるために、母校に集い、学術的な交流会を行っています。今年度は「看護学教育の課題—学部・大学院のコンピテンシー育成の課題」をテーマに研鑽しました。



**第3回世界災害看護学会(北京)**  
共同災害看護学専攻の大学院生は、国際学会や海外での研修に積極的に参加しています。先日は、東アジアの若手研究者の集まりである、East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS)でもポスター発表を行いました。



## ■ 博士(看護学)の学位授与への道程

博士学位審査委員会では、公聴会でのプレゼンテーションを参考に、博士論文の審査と最終試験を実施します。大学院生は、研究成果を全力で発表し、看護学への貢献を熱く語ります。看護学研究科委員会で、博士(看護学)の学位授与の可否について審議決定がなされます。



## 修士論文発表会

修了前の3月には、博士前期課程の総決算となる修士論文発表会が行われました。

## 全国各地で活躍する

### 小迫 富美恵さん(28期生) 横浜市立市民病院

「がん看護を専門として、患者さん家族だけでなく、看護スタッフの力を支える」



1996年、私はがん看護の専門看護婦として、横浜市立市民病院にてフィールドワークを始めました。がんの痛みや死にゆく人、家族のケアに対して6か月間「この病院にがん看護の専門看護婦が必要か？」を問われる実地試験でした。

当時、横浜市衛生局の看護課長だった鶴田氏(現日赤看護大学 看護管理学教授)や、先行して入職していたリエゾン精神看護専門看護師の野末さん(高知女子大29期生)に支えられて、幸いにも合格！ がん看護CNSとしてここから、第二の看護人生をスタートしました。

CNSの働き方は、それまでにないスタイルなので、看護部長や管理者の理解を得て、試行錯誤をしながらCNS機能を作り上げていきました。

第一に居場所。組織横断的に動くために、私は看護部管理室の中に机を置いてもらいました。病棟や外来にそこから出向く方式です。そして時間。看護部内ではフレックスタイムで、迅速に柔軟に。家族対応や医師とのカンファレンスは、診療時間の後が多いため、17時以降をターゲットにしています。

すべてが「開拓」の連続で、「緩和ケア」がキーワードです。一般病院での緩和ケアの実現の希望を胸に、難関を皆で乗り越える喜びが私を支えてくれました。「緩和ケア勉強会」の医師、薬剤師、看護師の有志たちは、「緩和ケア病棟」を作りたいという願いは一致していました。が、計画が浮上しては却下されの繰り返しで、なんと実現までに12年の時間を要しました。しかしその間に、緩和ケアチームを結成して活動を始め、外来化学療法室の開設、認定看護師の育成等、2006年のがん対策基本法成立の追い風でがん拠点病院指定にかかわることができたのは幸いでした。「オンコロジー担当課長」の役職は、がん拠点病院のさまざまな要件整備には的確な組織的位置づけとなっています。

18年経て現在は、がんと共に生きる人に対して「がん相談支援センター」の副室長として、がん患者さん・家族の苦悩に寄り添い、その方々が然るべき方向を見出して第一歩を踏み出せるようにサポートする日々です。

私のCNSの仕事も終盤に入り、目下の課題は、後継者を育てること。これからは、いかに継ぐか？です。創世記の孤独を経験しただけに、CNSの組織作りの必要性を痛感し、OCNS研究会をはじめ、多領域のCNSが集う日本専門看護師協議会もでき、昨年には、CNS学会として再スタートしています。大学院のCNSコースに学ぶ皆さんのためにも少しは助けになるようにと思っています。

### 則村 良さん(修士10期生) 駒木野病院



同窓生の皆様、はじめまして、またはご無沙汰しております。高知女子大学大学院看護学研究科10期生の則村です。私は今、東京都八王子市(ミシュランが選んだ3つ星観光地として有名な高尾山の麓)にある駒木野病院という単科の精神科病院でCNSとして勤務しています。

私は駒木野病院の初めてのCNSなのですが、大学院修了後に縁もゆかりもなかった駒木野病院に勤め始め、最初に出席した管理会議で病院長から「CNSって何なの？ 中枢神経系(Central nervous system)なの？」と言われて、『これからどうしたものか…』と頭を痛めたことがかしく思えます。今では、病院でCNSという名前は定着し、CNSという役割が全職員に正しく認識されたとは思わないのですが、何か困ったことがあれば「CNSが加わってもらえないか」と言われるくらはなりました。

現在、私は病院を横断的に動き、医療チームがケースを援助する状態になっているか、医療チームがケースをコンテイングできているかということに気を配りながら、困難なケースに対して直接的にケアを行うことや、ケースにどうやってアプローチすればいいのかということについてスタッフと患者・家族の理解を深めながら再アセスメントを行うこと、チームの調整を行うことが役割の中心になっています。他には委員会と協力をしながら教育活動をしたり、スタッフの研究指導に取り組んだりもしています。ちなみに、便利屋として使われているところもありますし、変に理想化されたものとして扱われていたりしているところもあります。そして、依頼を受けた時に『こんな状況になるまで…』というところではなく、もっと手前で声をかけてもらえたり、介入できたらなぁと思うこともあるのですが、それらの解決は次の段階の課題と考えています。

まだまだ駆け出しのCNSと思っていたのですが、CNSの活動を始めてから6年が過ぎ、CNSの認定を受けてからも5年が経ち、そろそろ1回目の更新の時期に差しかかっています。上記のものを含め、まだまだ課題は山積しているのですが、「高尾山の麓の変革が日本の変革につながっていけばいいなぁ」と空想をしつつ、日々、頑張っていきたいと思っています。皆様、今後ともよろしく願いたします。



## 専門看護師(CNS)

関根 光枝さん（修士 10期生） 日本赤十字社医療センター



自らの患者家族体験から家族看護の必要性を痛感し、8年前一念発起して看護学研究科家族看護学領域 CNSコースに入学しました。当初は慣れない座学に体を持て余す日々でしたが、10数年ぶりに看護理論をはじめ、看護倫理など様々なことを学んでいく中で、それまでの臨床経験を振り返りながら、改めて“看護”のおもしろさや奥深さを感じることができました。

修士課程終了後は、日本赤十字社医療センターに再就職し、患者家族の生活に関わる支援を必須とする退院調整や療養相談等を担う「総合医療相談室」への配属を希望し、2010年には家族支援専門看護師の認定を受けることができました。日々の患者家族との関わりや自他部署からの相談などに応じながら、自身の専門性を生かした実践をはじめ、専門看護師としての役割が果たせるように活動しています。

家族支援専門看護師として活動する上の基盤となっているものは、修士課程で学んだ野嶋佐由美先生らによって開発された「家族看護エンパワーメントモデル」です。ありのままの家族を受け入れ、理解しようとする姿勢を持ち、真摯に患者家族と向き合っていくことを大切にしながら、見方を変えれば弱みも強みに変えることができることを信念とし、家族の力を信じて限られた時間の中でも焦らずに支援していくことを心がけています。そして、院内外の研修や雑誌の執筆などを通じて、この姿勢を広く浸透させ、家族看護の発展につなげていくことを目指して活動しています。

恥ずかしながら修士課程修了時は、他分野の専門看護師が行う家族への支援とどう異なるのか、家族支援専門看護師の専門性について、なかなか言語化することができませんでした。しかし、臨床における実践や自施設における他分野の専門看護師との協働、月1回開催する抄読会などでのディスカッションを通して、その違いがみえてくるようになってきました。また、日本専門看護師協議会を通じた家族支援分野の活動の一つとして事例検討会を開催し、他施設の家族支援専門看護師とディスカッションすることで、当分野の専門性がより明確にみえてきたように感じています。まだ十分に言語化できるまでに至っていませんが、自身の活動のみならず、他分野、他施設の専門看護師との交流を深めながら、私の課題である「研究」にも取り組み、当分野の専門性の確立と家族看護の発展に寄与できるよう努力していきたいと思っています。

目原 陽子さん（修士 7期生） 大分県立病院



「一体自分は今まで何をしていたのだろう・・・」臨床と教育現場を経験した後、高知女子大学大学院へ入学した私は、大学院で学ぶ中で、看護師として働く過去の自分と何度も対峙していました。それまでの私は、目の前の事象にとらわれ巻き込まれてしまい、対応できないことも多くありました。教員時代は「学生に看護をうまく伝えられない」と苦むこともありました。

しかし、大学院で、ニュートラルに客観的にかつ文脈の中で現象を捉えていく訓練を繰り返すことにより、今ではそれが「私の考え方のクセ」となりました。その「考え方のクセ」のおかげで、うまくいかないことがあっても、自分が立ち戻る場所を定め、今自分が何をなすべきか、先を見据えながら思考・行動できるようになった気がします。

現在私は小児在宅ケアに携わらせていただき、医師や看護師、地域の支援者の方々と共に、子どもの退院支援や在宅療養の継続支援に取り組んでいます。直接ケアはもちろん、地域連携やスタッフの相談対応、在宅ケアの充足を目指した研修の実施などに努める日々です。医療的ケアを要する子どもは、成長発達過程で、「目が離せない」「こまめにケアの変更が必要」「就園就学など発達課題への対応が困難」など長期に渡って様々な課題にさらされます。一朝一夕には解決しないことも多いのですが、子ども達・ご家族を中心に、少しでも事態が改善されるよう、関係者同士で、時には行政に働きかけて地域ぐるみで相談し合いながら取り組んでいます。

また、実践以外では、講義や執筆、学会等での教育・研究活動など、CNSとして求められる役割もあります。不慣れなために苦労しますが、活動を通して新たな場や人、考えに出逢い、私自身育てられる感覚や気づきを得る喜びもあります。ある時、受講生から「品川さんはA先生(高知女子大学大学院の先輩)と同じにおいがあります」と言われたことがあります。驚いた反面、以前「学生にうまく伝えることができない」と悩んだ「看護」を、高知女子大学の根底に流れるものとして少しは伝えられるようになったのかもしれないと、嬉しくもありました。

難渋することもあります。前を向いて、子ども達と共に歩み、一つ一つ経験を積み重ねることにより、それが皆の力となってよい循環が生まれていることも日々実感しています。今後も、子ども達とご家族にとって「最もよいことは何だろうか」という軸を大切にしながら、看護師として関わる責任と意味を真摯に考えながら、努めていきたいと思っています。

# ようこそ先輩！

## 下平 唯子さん（18期生） 日本赤十字秋田看護大学



団塊の世代である18期生が学生の頃は、経済的自立は女性の社会的自立には欠かせない要件で、女子大の衛生看護学科で学ぶことが、自立へ向けた確実な第一歩でした。

しかし、その当時は看護婦や保健婦のように婦が付く職業は未だに社会的地位が低く、できるならそれらの職業にはつきたくないと思っていました。入学したものの、“・・婦”になりたくなかった私は、山崎近衛先生の今思えば本当に貴重な従軍看護婦としての体験談をさらりと聞き流し、貧乏旅に出かけたり、学園紛争の一環で帯屋町でのジグザグデモに参加したりと社会勉強にエネルギーを注ぎ込み、看護の勉強には斜に構えていました。ところが不思議なもので、看護婦になり主婦になり、看護を教える立場になった今、あの時の近衛先生が体験談を通して何を伝えたかったのか、その時の先生の思いに立ちかえられるようになり、現象から抽象度をあげて物事を考えられなかった自分の未熟さを思い知らされました。

卒業年度には、学生の半数が県外で就職する現状に、高知県で育成した看護学生は県内で就職するよという県の意向に対して『高知県内に留まらず、日本中に、日本といわず世界に飛び立ちなさい。女子大で育った人が世界で活躍することが高知の誇りである』という和井先生の言葉に大きな感動を覚えたことを今でも鮮明に思い出します。

その言葉通り高知を飛び出した私は、看護教員として無事に定年退職を迎え、現在は日本赤十字秋田看護大学で、がん看護教育に携わっています。今年の4月よりがん看護専門看護師38単位の教育課程が新設されることになり、出稼ぎが数年続きそうです。秋田といえば、気候風土・経済的にも医療文化的にも高知とは真逆の世界で、ハングリーでないということは、こも変革を求めず現状の安泰に固執するものなのかと驚きの連続です。いまだに南部藩や佐竹藩という言葉が飛び交い、藩意識の閉鎖性に江戸末期にタイムスリップしたような印象があります。しかし、このおかれた状況を秋田の県民性や医療文化の理解を深める機会とし、秋田県人による秋田県民のためのがん看護教育を遂行するための糧にしていきたいと考えています。

最後に、高知城下より浦戸湾を見渡せる新しい土地で、共学となり伝統を重んじつつ変革を推進する高知県立大学看護学部がこれからも日本の看護教育を代表する大学として、ますます発展されることをお祈りしています。

## 多田 敏子さん（19期生） 「看護の時代を生きる」

高知県立大学看護学部同窓会の皆様、いかがお過ごしでしょうか。昨年夏に、高知県立大学同窓会であるしらさぎ会の徳島支部代表として久しぶりに大学（永国寺キャンパス）を訪問しました。また、本稿記載にあたって、初めてFacebookで看護学部のページを拝見しました。それらから感じたことは、高知県立大学の「勢い」と、特に看護学部の「つながり」です。南裕子学長、野嶋佐由美副学長をはじめ、皆様が一体となって、学ぶ人と地域（国内外）の人々、教職員をつなぐ環境を築かれている様子がにじみ出ています。大学名の変更や、学生定員の増加、共学等、時代は変わっても、長年培われた校風は変わらないものだという思いを新たにしています。

私は昭和44年4月から48年3月まで、高知で学びました。当時は衛生看護学科でしたが、「衛生」という言葉が看護の目指す方向を示しているように感じ、今でもとても気に入っています。そのころ、まだ学生運動の名残があり、キャンパス内に立て看板などが残っていましたが、看護の学生は、先生の御自宅を訪問したり、研究室で雑談したりと今では想像できない程、先生方と多くの交流がありました。私が印象に残っていることは、先生方が学生を「大人として」見守ってくださったことです。このことは私にとって大切な役割モデルとなりました。大学卒業後、東京女子医科大学で臨床4年、看護教育2年、そして徳島大学では35年間看護教育に携わってきました。看護教育では専修学校、短期大学、大学学部、大学院前期・後期課程で仕事をしました。時代の流れの中で、溺れないようにがむしゃらに泳いできたように感じます。定年まで2年を残しましたが、いろいろな意味で区切りがよく、平成26年3月に徳島大学を退職しました。退職後は、自分の住んでいる地域を毎日歩き、愛着が湧いてきました。

昨年、医療介護総合確保推進法が制定されました。また、2025年には認知症の人が約700万人に達すると報じられました（厚労省；2015.01.07）。これから、私達は、ケアする人・される人というように、役割分担できない時代を生きることになりそうです。特に、団塊世代の生き方が問われています。これを自分の課題として受け止め、過ごしていきたいと思っています。初めて「町の保健室」相談員にボランティア登録しました。一人の住民として地域の自治会、婦人会の役割を受けました。地域の中に身を置き、つながりを作りたいと思っています。





## カナダで活躍する 所 和香子さん(43期生) ファミリー・ナースプラクティショナー(NP)として

“Create your own job”これがナースプラクティショナーとして出勤した第1日目にメンターの外科医から掛けられた言葉でした。これまで臨床看護師として決まった枠組みの中で仕事をしてきた私にとり非常に心地のよい言葉ではありましたが、オリエンテーションもなく、職務記述書もなく、相談出来る同僚もおらずと、ないない尽くしの中で、試行錯誤を繰り返しながら、自分の仕事を創り上げている段階です。

私の勤務する心臓外科病棟は、術後の患者さんの回復、そしてご家族をサポートするため、多職種間での連携・協働が綿密に行われています。その中でナースプラクティショナーは看護理論と看護哲学を基盤とした看護職でありながら、独立して診断・治療を行う裁量権を持つ専門職という独自性を生かし、術後合併症の早期発見・介入、急性・慢性疾患の管理、そして退院調整に取り組んでいます。他には週一度退院後のフォローアップ外来も担当しています。

この外来も個々の患者さん、そしてご家族のユニークなニーズに応えるため、心臓外科専門の看護師、薬剤師、栄養士、ソーシャルワーカー、そして理学療法士と協働しながら、グループビジットと個人診療をミックスさせた形式を展開しています。



所和香子さん

ナースプラクティショナーとして働き始めて一番困難に感じているのは、患者さんを始め他職種や管理職者の多くがナースプラクティショナーをフィジシャンエクステンダーと認識している中で、ナースプラクティショナーは看護職であるということを理解してもらおうことです。

そのためには、自らが看護師として診断・治療権を持つとはどういう意味があるのか、看護が高度化するということがどういうことなのか、ということをお自分の言葉で説明できなければならないのですが、この仕事を始めて4ヶ月余り経った現在もその答えを模索中です。私の看護の原点は看護学を学んだ高知女子大学と看護実践を学んだ虎の門病院にあるのですが、恩師そして大学・病院の同期達と看護について語り合う中で、自分なりの答えを導き出すことが出来るのではと思っています。何年経っても看護について語り合える方達と巡り会えたことは、私の中での掛け替えのない宝になっています。



病院の庭にある新渡戸稲造氏の墓碑日本庭園  
後方は開院当時からあるチャペル

Royal Jubilee Hospital, Victoria, British Columbia, Canada

日本、カナダそして他の国々でも看護を取り巻く環境は常々変化しており、昨今はそれが特に顕著であるように感じています。それに伴い看護職の役割拡大に対する期待感も高まっています。そんな時だからこそ看護とは何か、という原点に戻り、看護の知識に基づいて、看護者だからこそできることを考えることが大事ではないかと思う日々です。

最後になりましたが、高知女子大学で看護を学んで来たことに感謝しつつ、母校の更なる発展を祈っております。

(所和香子さん記)



### 所 和香子さんによる特別講義



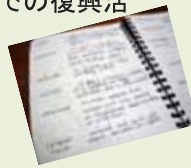
平成27年1月8日(木)～9日(金)、「海外で看護を学び活動する」と題して学部生対象に特別講義が行われ、1回生から4回生まで17名の参加がありました。

大学院生対象の特別講義「カナダのNP制度」には22名の参加がありました。高度実践看護師の一種であるNPの役割や活動の実際について伺い、日本のCNS(専門看護師)との違いを知ることで、参加者は大学院修了後の自らの役割のあり方を見つめ、いかにしてその責任を引き受けていくかを考える機会になったようでした。教員対象の特別講義「カナダのNP教育」では、カナダにおけるNP誕生の背景や期待される役割などについてお話を伺いました。所さんのお話はどれも興味深く、その語りを通して異文化に触れ、広い視野や国際的な感覚を持つことの重要性を感じた2日間でした。

所さんのお話はどれも興味深く、その語りを通して異文化に触れ、広い視野や国際的な感覚を持つことの重要性を感じた2日間でした。

## DNGL 1期生 Global Leaderを目指して

私たちは平成24年度に博士課程教育リーディングプログラム(文部科学省)に採択された「災害看護グローバルリーダー養成プログラム(Disaster Nursing Global Leader Degree Program、以下DNGL)の1期生としてこの春から学び始めました。このプログラムは5大学(高知県立大学、兵庫県立大学、千葉大学、東京医科歯科大学、日本赤十字大学)の共同大学院という新しい取り組みの、5年一貫の博士課程です。学生のバックグラウンドとしては、臨床での看護師経験に加え、保健師、独立行政法人 国際協力機構(JICA)での海外活動経験、海外留学や東日本大震災での復興活動の経験など様々です。



諸澤美穂さん 西川愛海さん

5大学という物理的に距離が離れている私たちはTV会議システムを使用し普段は遠隔授業を、時に実際に対面する集合授業を受けています。初めの頃はさまざまな課題がありましたが、今はそのシステムにもだいぶ慣れ、一年後期からは5大学同時に行うシミュレーション授業も開始されました。遠く離れていても同じような環境で同じ学びを共有することができるのもこれらのシステムのおかげであり、また普段めったにお会いできないような先生方ともこのシステムを通じて頻回に対話することも可能なことはこのプログラムの最大の魅力だと感じています。

私たちは‘日本ならびに世界で求められている災害看護に関する多くの課題に的確に対応し解決できる高度な実践能力かつ研究能力を兼ね備え、国際的・学際的指導力を発揮するグローバルリーダー’となることを目標としています。この目標に近づくために授業以外にも、国内外から講師をお招きして講座開催やディスカッションなどを行ったり、様々な学会や会議に出席し新たな知識を得、また発信し、さらには海外の他分野との共同研究や産官学で行う訓練などその学びの機会は多岐に渡ります。それらに加え、高知県立大学では高知医療センターとの合同訓練や、須崎市高陵病院での防災・減災研修会、避難情報共有訓練などを行い、私たちDNGL生も企画段階から参与しました。このように地域との連携を大切にし、地域の人たちと共に共同訓練を企画し実践しながら、コミュニティの減災に対するポトムアップに寄与しています。

2014年は多くの災害が全国各地で発生しました。今後もその増加が懸念される我が国において人々の健康や生活を支えることができるように、国内外問わずローカルにもグローバルにも対応・発信することへ寄与できるよう学びを深めていきたいです。

フィリピン マニラにて  
2014年9月



(諸澤さん、西川さん 記)



## 温故知新 その6



朝日ジャーナル 1980年 2月8日号 (第22巻5号) p.40-46

今回は、川島みどり先生が、1980年2月、朝日ジャーナルに寄稿された「高知女子大学—全国に先がけ四年制看護教育」を紹介します。

川島先生は、1979年の秋に高知女子大学家政学部衛生看護科を訪問して、和井兼尾先生、山崎智子先生、松本女里先生にインタビューするとともに、【女子大三十年史】【衛看二十年史】(原文表記のまま)を参考に記事を書かれています。

当時は、「看護教育の主流は、医療施設に付属する各種学校で、全国七百数十校に及ぶ。短大は三年制で二九校、二年制二七校であり、大学において看護学を履修できるのは、わずか一〇校にしかすぎない」「(看護婦は)わが国の医療の特徴である開業医制度の発展により、私企業としての医業の介助者として生まれたため、徒弟的な養成が長く続いた。この影響は根強く、今日でも『頭でかちの看護婦は使いものにならない』とか『学問より人柄』、『医師の手足としての看護婦でありさえすればよい』といったことが公然といわれている」状況だったようです。

晩秋の土曜日の午後八時、人気のない学舎の階段を三階までかけのぼり、山崎智子教授の部屋を訪れた。和井先生も待っていて下さった。在京の卒業生たちから、口々に「高知に行ったら、和井先生に必ず会うこと」と念を押されたことを思いながら初対面の挨拶をする。

「みんなで、一緒に困難をのりこえ、喜びを分かち合うといった家族的校風がいつからともなくできていました。」

半生を衛看とともに歩んだこの人の口から出る言葉は、淡々としていた。看護教育といえば、頭のとっぺんからつま先までお仕着せで、食費もただ、月謝不要といった企業の労働力拡充対策として行われるのが当然であった時代に、ユニホーム持参、すべての費用は自費でという教育は異色であった。初期のころは県下をくまなく歩き、志願者をつのったり、父兄を説得しなければならなかった。

だがなんとといっても、県当局や県議会の看護教育への理解を高めることには相当のエネルギーを費やしたという。

「女子教育は短大でよいといった考えは、根強くありましてねえ。特に、昭和二十八年にはまだ卒業生も出していないのに、各種学校に格下げして、県立中央病院に併設するといった案が知事から出され、全学あげて猛反対運動をしました。でも、このことがかかって女子大のPRIにつながって志願者が増えたのですよ。」

キラリと光る老眼の奥に、かつての闘志をみる思いがした。

再び卒業生の言葉を借りよう。彼女らは「和井先生の教育は、手のひらの中で大事にされ、見つめられ、そしてコントロールされず自由であった」という。ともすれば型ハメ教育に陥りがちな看護教育の中で、和井式教育は型破り教育であったとも言える。そして、それができたのは、曲がりなりにも総合大学であり、看護の専門以外の有能な教授陣の援助にまつことが大きかった。心理学の笹原教授、教育学の芝田教授らの、看護教育への深い理解と、親身の学生とのふれあいは、いわばマンツーマンの「てづくり教育」であり、マスプロ化しつつある大学では得がたいものである。

具体的な高知女子大学家政学部衛生看護科の特色についての記述は、次回紹介します。

教科書やその他の古い看護の文献、あるいは看護の雑誌等をお持ちの方で、寄贈してもいいとおっしゃる方がおられましたら、是非下記までご連絡・ご送付【連絡後、送料受け取り人払い】下さいますようお願いいたします。

〒781-8515 高知市池2751-1 高知県立大学看護学部同窓会 088-847-8718 (担当:川上理子)

## 同窓会役員として

### 山本 雅子さん（23期生） 高知県庁健康政策部健康長寿政策課



看護学部同窓会が発足してから5年間、会計監査をさせていただいています。高知県の保健師をしていますので、保健師の研修会の企画・運営の打ち合わせで、地域看護領域の先生には度々お会いしていますが、役員をしていなければ、他の領域の先生にお会いする機会はほとんどなかったと思います。

会計監査の役割の1つは、年3～5回開催される役員会に出席することです。総会や同窓会会報の内容の協議が主となります。総会や学会の報告、同窓生の近況報告、看護学部の活動紹介など、会報の内容は盛りだくさんですが、学内の役員の方が、案を準備してくださっているので、協議はスムーズに進みます。

2つ目の役割は、会計監査です。通帳、帳簿、証拠書類はきれいに整理されているので、チェックは短時間で済みます。総会当日に、きちんと処理されていることを報告して終わりです。そして、3つ目の役割が同窓会の懇親会での司会進行です。いつも、学内の役員の方々にお世

話になっているので、外部の役員のがんばりどころです。同窓生の近況をインタビューしながら会場を回りますが、一番の楽しみは、出し物です。梶原会長が毎年、素敵な企画を提案してくださるので、楽しいタベとなっています。

覚えていらっしゃるでしょうか。平成24年は、得月楼で「しばてん踊り」を踊りました。当日練習しただけのぶっつけ本番。しばてんのお面をつけて、見よう見まねで踊りました。25年は、ジャズ喫茶「ALTEC」でシャンソンのタベでした。生でシャンソンを聞くのは初めてのことで、ゆったりした時間を楽しみました。26年は城西館で、近森病院の若手看護師さんたちによる「セーラー服を脱がせないで」の歌にあわせた振り付けで、梶原会長と山崎マリさんもセーラー服姿を披露してくださいました。

同窓会の役員となって、大学の先生方や先輩、後輩の方と関わる機会をいただいたことに感謝するとともに、同窓会のつながりの温かさを感じています。同窓会にあわせて同期が集まったこともあります。皆さんも同期に声をかけ、ぜひ学会、同窓会に参加して、懐かしい先生方、同窓生の皆さんと楽しいタベを過ごしてください。今年の学会、同窓会は7月18日です。皆様の参加をお待ちしています。

### 角谷 広子さん（25期生・修士5期生） 医療法人みずき会 芸西病院



36年前の春、私は、家の事情で県外の病院に就職するのを断念して、高知県東部の伯父の家から現在の職場、芸西病院に勤務を始めました。精神科が母体の民間病院ではありませんが、高知女子大学看護学科の先輩が4人、また、姉妹病院の藤戸病院にも2人の先輩がおられ、大変恵まれた環境の中で看護師としてスタートしました。

その当時、先輩たちが女子大の先生のお部屋をお借りくださり、毎月1回程度のペースで精神科看護の勉強会を開催していました。私も仕事を終えて家路とは逆方向に車を約1時間かけて永国寺に向かい、勉強会を終えて夜9時半頃、復路1時間半かけて帰宅していました。それが、当時の私にとって唯一のアカデミックな空気との繋がりで、看護師としてのアイデンティティを繋ぎとめる時間でした。その勉強会の構成メンバーは、現在、この同窓会の会長をしておられる梶原和歌さんをはじめ、全国的に精神科看護領域でご活躍の先輩、後輩、計10名程度だったと記憶しています。皆、20歳代、30歳代であり、柔軟な発想でディスカッションしていく中でより精神科看護の視点を磨いていったと思います。そして、1～2題は投稿論文に仕上げたことでした。今、定年まで僅かの年数を数える年齢になり、自分の人生を振り返ると、高知女子大、そして大学院の諸先輩、同級生、後輩の皆様との出会いが、自分の人生にとってどれほど豊かなものになっているかを実感し、感謝の念に堪えません。

先日、高校時代の親友に会って、同窓会について語る機会がありました。彼女は文系の大学を卒業後、一般企業で勤めています。大学の思い出はアルバイトをしたこと、卒業後は、仲の良かった大学時代の友達とはいつのまにか縁が切れてしまったこと。そして、卒後一回だけ同窓会に参加しただけで、あなたのように大学にコミットした気持ちは、今となっては少ないかもしれないとの内容でした。大学と同窓会の繋がりが、あり様について考えさせられたことでした。

夏の看護学部同窓会は、毎回和やかな雰囲気であり、参加して下さる年代層が厚ければ厚いほど、母校の看護学部の歴史に重みを感じています。しかしそれだけではなく、大学の規模が拡充しても、今後も同窓会の様々な活動を通して老若男女の同窓生が顔見知りになり、看護と言う共通の仕事の中で相乗効果を発揮できるような繋がりを強めていける母校の同窓会でありたいと願っています。



## 夏銀河～学生ボランティア活動支援

いつも学生活動のご理解とご支援を戴き、心から感謝申し上げます。学生の被災地ボランティア活動も、今年で3年目となりました。東北では「大勢で短期間」ではなく、「少数精鋭で腰を据えた」活動に変化し、看護学部からは2名、全学からは計6名が滞在型支援に参加しました。また9月には、8月に発生した広島土砂災害復旧支援にも参加する機会を戴き、1泊2日の活動に、看護学部からはDNGL院生2名を含む3名、全学からは計20名が参加してきました。

### 東日本大震災復興支援ボランティア【いわてGINGA-NET「夏GINGA」学生ボランティア活動】

東日本大震災から3年経過した2014年の夏、私たちは岩手県で多くのことを学び、経験しました。ボランティア活動に参加しようと思ったのは、メディアの選択した情報ではなく、自分の目で今の東北を見たかったからです。

実際、東北には約2週間の日程で、被災地を訪れたり、仮設住宅の訪問やレクリエーションの計画、学習支援、漁業や農業活性化のお手伝いといった活動をしてきましたが、自分の目で見て、他大学・他学部の学生と意見交換をする中で、自分の中でも考え方が変化するのがわかりました。はじめは震災から3年間経過した今、自分のできることがあるのかという疑問もありました。



実際に被災された岩手県立大学の学生から、宮古市の被災前後の様子、現在の宮古市周辺の様子を聞いているところ。

一緒に活動した全国の仲間達と…  
(大槌町、ひょうたん島の近くにて)



しかし、3年経過した今でも仮設住宅で生活している方は大勢で、津波の被害を受けた沿岸部はまだ更地の状態でした。この情景が、将来起きる南海トラフ巨大地震で被災を受けるであろう高知と重なり、この現状から学び、今後の減災とそのため制度づくりに役立てていかなければならないと思いました。

震災の経験が風化しつつある今、まだ復興の過程にある東北を訪れ、私たちはこのことを風化させてはならないと思うと同時に、自分がこれからすべきことは何か、を考えさせられるきっかけになりました。

2回生 山岡春菜・山口真理

### 広島市土砂災害復旧支援ボランティア【高知県公立大学法人企画 学生ボランティア活動】



甚大な被害を受けた八木地区での献花と黙とう

被災地域のお宅に訪問し、生活物資を届けました。



細かい真砂土に苦労しつつ、ひたすらお掃除…



8月の広島土砂災害から約半年、広島では今もまだ自宅に帰ることができず、公営住宅や賃貸住宅で生活している人が256世帯もあるそうです。私たちはこの災害から約1ヵ月経過した9月の下旬に、高知県立大学のバスで広島でのボランティア活動を2日間経験してきました。1日目は砂のまだ舞う道路の清掃、2日目は被災地区のお宅訪問をして健康状態の把握や自宅の被災状況を伺ったりしてきました。

2日目のお宅訪問では、ボランティアがお宅訪問をしましたが、地域の人が見ず知らずの私たちにニーズを話しやすくなるにはどのように声をかけたらよいのか迷いました。また活動中には、災害時には自分よりもっとひどい状況の人がいるから他の人を先に訪問してあげてという声や、あそこは高齢者の世帯だから、と地域の人同士が互いを気づかいあう思いに触れる中で、地域のコミュニティの重要性を実感しました。

そして、このような時に保健師をはじめとする看護職の専門性を発揮できるのではないかと、改めて思う活動となりました。

## ご寄付をいただいた方

下記の皆様より寄付をいただきました。誠にありがとうございました。(平成27年2月28日現在)

西岡美智子様(4期) 竹中リツ子様(7期) 高橋 久子様(7期) 三好 和子様(13期)  
岡本 陽子様(14期) 久常 節子様(14期) 野並 葉子様(19期) 大村 典子様(23期)  
赤松久仁子様(26期) 橋本 恵理様(32期)

### 平成26年度 高知県立大学大学院 看護学研究科 博士前期課程の院生の修士論文発表会



平成27年3月7日、看護学研究科博士前期課程の院生の修士論文発表会が開催されました。15名の院生は、それぞれの専門領域における自らの研究の間をもって修士論文の作成に取り組み、その成果を発表されました。

### 平成26年度 高知県立大学看護学部 学生の看護研究発表会



平成27年3月3・4日は、看護学部4回生の看護研究発表会が開催されました。高知県立大学そして男女共学になった年に入学してきた学生さんたちです。

### 同窓会総会ならびに懇親会 のご案内

日時: 平成27年7月18日(土) 18:30~21:00(予定)

詳細は改めてご案内いたします。

多くの方のご参加をお待ちしております。

## 寄付のお願い

同窓会への寄付のご協力をよろしくお願いいたします。  
寄付金は、同封の振込用紙にてお願いします。ホームページでもご覧いただけます。  
ご不明な点はいつでもお問い合わせください。

同窓会が設立された時、初代会長をお引き受けいただいた南 裕子先生が、翌年の平成23年から、法人化された高知県立大学の理事長兼学長になられたことに伴って、現同窓会長の梶原和歌会長に引き継がれました。このような節目にあたって、同窓会長が、南学長と対談し、高知県立大学の二期目の学長として、今後の大学の構想や、看護学部への期待などをお伺いするという大変意義深い企画が実現しました。

南先生には、年度末のお忙しい最中に、本同窓会のために貴重な時間を割いていただきましたことを感謝するとともに、同窓生の皆様と先生からのメッセージを共有できますことを、大変嬉しく感じております。ご意見、ご感想など、何でも結構ですので、事務局までお寄せいただくと幸いです。(森下・池添)

編集後記

### 事務局

〒781-8515 高知市池2751-1高知県立大学看護学部  
Fax: 088-847-8750

### ホームページアドレス

高知県立大学  
<http://www.u-kochi.ac.jp/>  
高知県立大学看護学部  
<http://www.u-kochi.ac.jp/~kango/>